

小学生における対人的感謝の研究(6) —抑うつに対する保護要因としての感謝感情に注目して—

○ 藤原健志 (筑波大学)
濱口佳和 (筑波大学)

村上達也 (筑波大学)
櫻井茂男 (筑波大学)

【問題と目的】

ポジティブ感情の一つである感謝は、2000 年代に入り、GQ-6 (McCullough et al., 2002)や GRAT (Watkins et al., 2003)など、感謝を測定する尺度の開発に続き、適応感との関連の検討(詳細は Wood et al.(2010)を参照)が行われるようになった。本邦においても、GQ-6 の邦訳(Hatori et al., 2014)や児童対象の対人的感謝尺度(藤原他, 印刷中)が開発され、感謝と適応感の関連が検討され始めている(例えば、村上他(2013)や西村他(2013)など)。その中でも、感謝と抑うつの負の関連は、成人を対象とした先行研究において一貫して明らかになっており(Froh et al., 2011; McCullough et al., 2002), 抑うつの保護要因として感謝感情が機能すると考えられる。一方で、抑うつの促進要因として特有の認知様式(スキーマ)の存在が指摘されている。抑うつの促進要因である抑うつスキーマのみならず、保護要因と考えられる感謝感情が、その後の抑うつをどの様に予測するのかを明らかにすることは、児童の抑うつに対する介入計画を立てる上で重要な情報を提供するであろう。

以上より、本研究の目的は、対人的感謝と抑うつの関連を、抑うつに関連するスキーマを含めたモデルを設定し、短期縦断的に検討することである。

【方法】

調査対象者 小学 4 年生から 6 年生 598 名(男子 290 名, 女子 308 名)を対象とした。

調査方法 各学級担任が以下の内容の質問紙を配布・回収した。

質問紙の構成 ①対人的感謝尺度：藤原他(印刷中)の対人的感謝尺度を用いた。本尺度は特性感謝を測定する GQ-6(McCullough et al., 2002)や

GRAT(Watkins et al., 2003)を参考に作成された、他者に対する感謝感情を表現する 8 項目(4 件法)から構成された尺度であり、信頼性と妥当性が確認されている。②抑うつスキーマ：児童の非機能的態度尺度(佐藤, 2005)を用いた。本尺度は児童の抑うつスキーマを測定する尺度であり、2 因子 13 項目(4 件法)から構成される。③抑うつ：DSRS-C(村田他, 1996)を用いた。本尺度は児童を対象に抑うつを測定する 16 項目(3 件法)から構成される。

調査時期 Time 1 は 2013 年 5 月, Time 2 は同年 11 月であった。Time 1 では上記①から③, Time 2 では上記③へ回答を求めた。

【結果と考察】

Time 1 の対人的感謝ならびに抑うつスキーマを独立変数とし、同時点の抑うつを統制した上で Time 2 の抑うつを感謝とスキーマがどのように予測するのかを明らかにするため、Figure に示したモデルについて、共分散構造分析を用いて検討した。その結果、Time 1 の感謝と抑うつの間には負の、同時点のスキーマと抑うつの間には正の関連がそれぞれ認められた。Time 2 の抑うつに対する Time 1 の対人的感謝ならびに抑うつスキーマの標準化総合効果は、それぞれ-.27 と.39 であった。以上より、縦断研究の結果、先行研究同様、非機能的思考がその後の抑うつと予測することが示された。一方、他者への感謝感情がその後の抑うつ感を低下させることは、新たな知見である。児童の抑うつに対する行動的アプローチは本邦でもその効果が示されているが(石川他, 2010), 児童の感情面、特にポジティブ感情を高めるアプローチもまた、抑うつ予防に寄与すると考えられる。

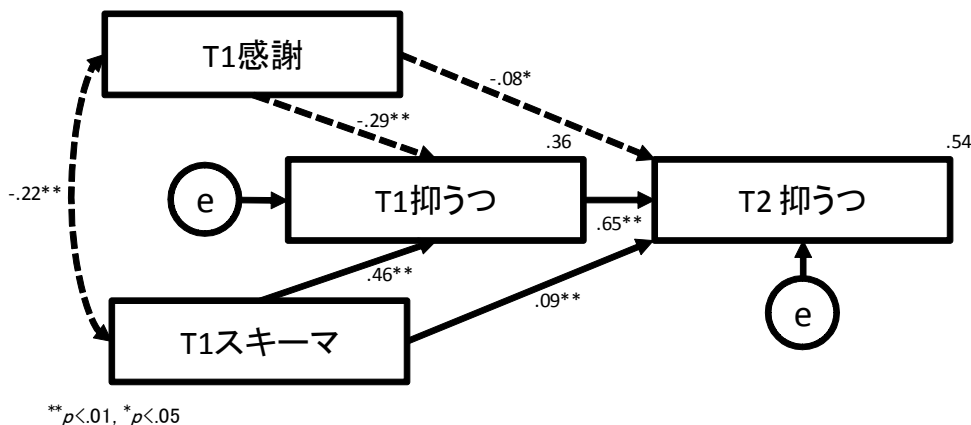


Figure パス解析の結果
— 729 —